

図画工作・美術グループ

1 図画工作・美術グループにおける「表現」の定義

作品の制作過程及び結果として、行為を形にしたり、自分の思いや感じたことを出したりすること

図画工作・美術では、制作の過程で児童生徒の様子や作品を比較した場合に、表現の変容を確かめることができる。また、身体を使って材料を感覚的に操作して能動的に自己の行為を決めていくという点から考えると、結果としてよりも、過程でいかに子どもが主体的な活動を展開できたかが重要になる。「表現」の段階表については以下（表1）に示す。

1 段階	2 段階	3 段階
材料への興味・関心に基づき、材料に親しみながら、思いつくまま作りたいものを作る。	材料・用具の性質を生かしながら、経験や想像を基に発想・構想する。	様々な技法を用いて、主題や構想に向かい、計画を立てて創造的に作る。

表1 「表現」についての段階表

今回の研究では「粘土で作ろう」の授業を行い、児童生徒の「表現」の変容を検証していく。過去に本校では、土粘土による制作が活発に行われていた。その時、指導していた成田氏により貴重な実践記録が書籍で残されている。現在でも当時の信楽の粘土が保管されており、今回その粘土を再生し、使用することにした。題材にした「土粘土」は、児童生徒の特性に拘わらず、心の状態を受け止め自由自在に変化する材料である。また、粘土と向き合い働き掛ける行為自体が表現となり、児童生徒の内面が写し出されるため、表現の変容を追っていくためにふさわしいのではないかという考えの基に取り入れることにした。今回の研究を進めるにあたり、成田氏の実践を記録した書籍や当時の児童生徒の作品を参考にしている。「粘土で作ろう」の単元の表現の段階表は（表2）に示す。段階表については、個別の目標設定時の目安として活用することとした。

1 段階	2 段階	3 段階
粘土に興味・関心をもち、材料・用具に親しみながら作る。	粘土・用具の性質を知り、経験や想像をもとに発想・構想する。	様々な技法を用いて、工夫しながら計画を立てて創造的に作る。

表2 単元・題材における「表現」の段階表（粘土で作ろう）

2 研究の方法

(1) 実践の概要

期間	平成27年12月～平成28年12月	
対象	小学部ひまわり学級6名，中学部5名，高等部3名	
単元・題材	「粘土で作ろう」（全学部）	
検証方法	・自己評価シート ・授業記録シート ・作品	
回数	研究内容	研究内容（小6回，中5回，高7回）
1	実態把握	○実態把握 【授業内容】 全学部：「粘土に親しもう（たくさんこねて，粘土と仲良くなるう）」
2 ～ 7	個々の実態に合わせた支援	○支援の実践・検討，自己評価・作品・エピソードの記録の蓄積 【授業内容】※（）内の数字は，授業回数 小：「おばけを作ろう」（2回目），「高く・高く」（3回目）， 「のりものを作ろう」（6回目） 中：「家を作ろう」（2，3回目） 高：「大きく高く作ろう（塔のように）」（3，4回目） 全学部：「個々にテーマを見つけて作ろう（自由制作）」

(2) 検証方法について (表3・4参照)

図1～4の自己評価シートは、児童生徒が毎時間授業の最後に、制作を振り返り、評価や満足度(気持ち)を数値及び文章で記入する。様式は、各学部の児童生徒の実態に合わせて用意する。数値では量的な変化を、文章記述は質的な変化を追い、両面から検証する。授業記録用紙には、教師が対象の児童生徒のエピソードや作品について記入する。(自己評価シートの記入が難しい児童生徒は、このエピソードを重視する。)また、事前に目標と支援の内容を記入し、授業後には支援の内容について検討し改善点を記入する。表4に支援の内容をまとめた。作品については、作品そのものと途中経過の写真をもとに変容を検証する。

検証方法	内容	
① 自己評価シート	評価や満足度(気持ち)を3～5段階で選ぶ。 気持ちや感想(頑張った点、工夫した点等)を文章で書く。	量的 質的
② 授業記録用紙	エピソードの記入。(制作の様子・作品の変容等) 支援の視点	質的
③ 作品	作品及び写真	質的

表3 検証方法

支援の内容
<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しい雰囲気づくり。 ・ 励ましや称賛、共感を中心とする言葉掛け。 ・ 主体的な活動を促進する言葉掛け。 ・ 制作のきっかけとなる言葉掛け。 ・ 複数の選択肢から選ぶことができるように提示する。 ・ 手を添えるなどしながら、一緒に作る。 ・ 指先を使いながら、作って見せる。 ・ 体全体を使って、作って見せる。 ・ 身近な用具を用意し、一緒に使いながら作る。 ・ 色々な用具の使い方を示す。 ・ 色々な用具によってできる形の違い伝える。 ・ 友達や自分の作品を見合う際、用具の使い方や技法について伝える。 ・ 友達や自分の作品を見合う際、感じたことについて考えを促すような言葉掛けをする。 ・ 作品について、教師がどのような感想をもったかを伝える。

表4 支援の内容



図1 小学部



図2 中学部

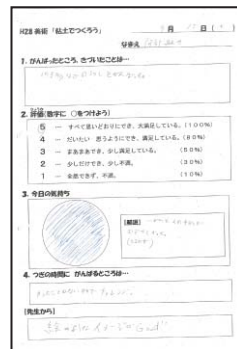


図3 高等部一①



図4 高等部一②



図5 授業記録用紙

3 研究の経過

(1) 各学部の取り組み

ア 対象児童生徒の実態

小学部の対象児童は、6名（第3学年3名，第4学年3名）である。学習に対しては意欲的であり，時間いっぱい活動に取り組む児童が多い。制作においては，自分で作りたいもののイメージをもって作る児童から，作る過程でテーマを見つけたり，粘土の形からイメージを膨らませたりして制作する児童までおり，実態の幅は広い。

中学部の対象生徒は，5名（第1学年2名，第2学年2名，第3学年1名）である。制作活動に対してとても興味・関心が強く意欲的に取り組む生徒が多い。テーマに沿って自分なりにイメージを膨らませて制作することができる生徒から，イメージがもちにくく取りかかりに時間を要する生徒や，うまく表現できずに作品を壊してしまう生徒までおり，実態の幅は広い。

高等部の対象生徒は，3名（第1学年1名，第2学年2名）である。自分なりにテーマを見つけて制作に取り組むことができる生徒から，粘土に触れることに苦手意識をもっている生徒までいる。

イ 単元・題材について

全学部において，最初は粘土と親しむために粘土に触れながら性質を知り，作りたいイメージを見つけて制作した。2回目以降の授業の導入部分では，制作のきっかけやイメージを広げるためにテーマを設定したり，身体や用具による技法について説明したりする場面を設けた。

小学部では，自由にテーマを見つけて制作することを基本としたが，テーマを提示して制作する時間も設けた。「おばけを作ろう」では，目には見えないものをテーマにし，限定されたイメージではなく，自由に発想を広げて作ることをねらった。「高く・高く」では平面ではなく立体を意識した作品づくりを，「のりものを作ろう」では，身近なテーマの中で自分のイメージを粘土で形にすることをねらった。授業をする際には，広い空間でダイナミックに活動できるように，3回目以降は，教室から遊戯室へと活動場所を変更した。さらに，お互いの制作の様子や作品を見ることができるよう，円形になって活動を行った。また他学部の教師を「粘土の先生」と称して講師に招き，粘土の扱いや技法について知る機会を作った。

中学部では，2，3回目はテーマを設定し，4，5回目は自由制作とした。テーマは「家を作ろう」である。生徒の身近にあるものだが，全てが同じ形ではなく自分が住んでいる家や住んでみたい家，こんな家があったら…など，イメージを膨らませやすく，意欲的に制作へ取り組むことができるのではないかと考えて設定した。その後の自由制作では，これまでの授業の経験を生かし，生徒の発想の広がり期待した。広い空間でのびのびと制作に取り組むことができるように体育館で行った。

高等部では，個々にテーマを見つける自由制作を基本とした。立体感のある作品づくりをねらい，3，4回目には，「大きく高く作ろう（塔の様に）」というテーマを設定した。場所は陶工室を基本とし，自分達が授業で制作した作品を目の前で鑑賞できる環境にした。6回目のみ，全身を使いダイナミックに作ることをねらい，体育館を使用した。

また，成田氏が実践した当時の作品を見たり手にしたりすることで，イメージを膨らませたり，重量感を感じたりすることができるような機会を作った。

(2) 対象児童生徒への指導経過

ア 小学部

・小3年男子 (G・R)

【実態】

- ・作りたいものを自分で決め、意欲的に取り組む。
- ・自分で作りたいものの形を考えて作る。
- ・粘土をのばして、好きな形を作ることができる。
- ・自分の作品について簡単な言葉で説明する。

【個人目標】

- ・粘土に親しみ、作りたいイメージに合わせた技法を使って作る。



回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「りょうまどにこりん」 ・縦20cm, 横30cm, 平面。 ・すぐに作りたいものを決め、一文字ずつ作る。完成するたび「できた」と話す。 ・手の平をこすり合わせるようにしながら粘土を紐状に伸ばす。粘土が重なる部分は、軽く押すものの、しっかりと付ける様子は見られない。	3 ・顔を作りました。くるくるしました。押ししました。 ・ハートを作りました。	
2	・立体的に作るように提案。 ・様々な技法を見せる。	作品名「ゾンビ」 ・縦, 横30cm, 平面。 ・粘土を紐状に伸ばし、線で絵を描くように形を作る。「これは人で、これはゾンビ」と話し、はっきりとしたイメージがある。 ・提案を受けても、作品に変化なし。	3 ・ゾンビと人と剣を作りました。 ・楽しかったです。	
3	・高く、大きく作るように提案する。 ・体全体を使って作って見せる。	・高さは20cm, 立体。 ・周りの友達を見て粘土をこねる。体重をかけてこねていた。 ・笑顔で活動する。 ・周りの友達の粘土を見て、「すごいね」「高いね」「ぼくのも高いね」と話す。		
4	・用具の使い方を示す。	作品名「ボウリング」 ・「もちつきみたい」と話し、楽しそうに金槌で粘土を叩いて形を変化させる。 ・別の粘土でボウリングのピンを作る。高さは4~5cm。ピンには爪楊枝で2本線を引いて模様を付ける。 ・ピンを立たせるため、何度か底が平らになるように試していた。	3 ・ボールは丸めてピンは丸2本、丸を描きました。 ・楽しかったです。	
5	・技法や用具の使い方を示す。	作品名「きんにく」 ・横幅25cm, 立体だが薄い。 ・始まるとすぐに作り始める。 ・粘土を細長くして土台にし、その上に小さい粘土を貼り付けて大きくしていた。 ・顔は用具を使って、傷を付けて描く。	3 ・筋肉の手を上げて顔を描いてオープン。 ・楽しかったです。	
6	・気付くような問いかけをする。 ・指先を使いながら作って見せる。	作品名「くるま」 ・縦, 横10cm, 高さ5cm, 立体。 ・集中して作品づくりに取り組む。 ・土台の脇に少しずつ粘土を貼り付け壁を作り、四角い箱を作っていた。 ・粘土を付けるときは、表面を指でなでながら、粘土をなじませていた。 ・教師が作品の感想を伝えると、笑顔になった。	3 ・ガラスの四角を作りました。タイヤを丸くできました。 ・楽しかったです。	

※自己評価の数値は自己評価シート(図1)「ひょうか」の1~3に対応する。

・小3年男子（S・H）

【実態】

- ・作りたいものを自分で決め、最後まで取り組む。
- ・作りたいものの形をイメージして、自由に作る。
- ・引っ張る、のばす、押す等の技法を使って作ることができる。
- ・自分の作品や友達の作品について感想を話す。



【個人目標】

- ・粘土に親しみ、作りたいイメージに合わせて技法を選んで作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「ぼくのなまえ」 ・縦40cm, 横20cm, 平面。 ・取りかかるまで少し時間を要した。周りの友達の様子を見て、漢字で自分の名前を作ることに決めた。 ・粘土を紐状にして文字を作り, 「僕は漢字で作っているよ」と周囲に話す。	3 ・粘土で, 心を作りました。 心の点を作りました。 ・嬉しい気持ちです。	
2	・様々な技法を見せる。	作品名「つよいおぼけ」 ・横20cm, 高さ15cm, 立体。 ・最初は手の動きが鈍いが, 後半は集中して取り組む。 ・考えて足を付ける。倒れそうになると, 自分から「倒れる」と話し, アドバイスを求めた。 ・授業時間内に終わらなかったが, 「完成させたい」と休み時間にも取り組む。	2 ・足と顔を作るのを頑張りました。楽しかったです。	
3	・高く, 大きく作るように提案する。 ・技法を示す。	・高さ25cm, 立体。 ・手本を見て, 体全体でこねる。粘土をたくさん上へ重ねて高くする。 ・倒れそうになると, アドバイスを受け, 横から斜めに支えを付けて工夫する。 ・鑑賞では「僕のが1番高いよ」と友達よりも高い作品を作ることができて笑顔。		
4	・用具の使い方を示す。 ・工夫点や感想を伝える。	作品名「とーきょうトンネル」 ・高さ25cm, 立体。 ・根本を用具で掘っていた。「ほら～」と見せて喜ぶ。爪楊枝で突き, 模様も付ける。 ・作品が不安定になり, 自分で考えて補強をする。作りながら「僕はトンネルにするよ」など何度も話す。	3 ・もっともっとトンネルを作りたい。もっともっと高く作りたい。	
5	・用具の使い方を示す。	作品名「いろんなえかきおぼけ」 ・縦, 横5cm, 平面。 ・粘土を平らにし, コテで小さく分ける。切った粘土の表面に, 爪楊枝で「えんぴつ」「こしごむ」などの名前を書く。形を似せているわけではない。 ・あまり集中できていない様子であった。	3 ・自分で, 粘土をつぶして爪楊枝で字を書きました。ものすごく楽しかったです。	
6	・作りたいイメージに近づくような作り方を提案する。 ・指先を使いながら作って見せる。	「作品名：にじゅうまるころころ」 ・高さ15cm, 立体。 ・車の車輪を作ろうとし, 平らで丸い形を作る。自分のイメージを話す, 思うようにならない様子。アドバイスを受けると, そこから発想を広げて作り始める。 ・イメージする形に近づけるため, 粘土を転がしたり, 形を整えたりしていた。	3 ・粘土をこねてちょっと転がしてみたけどできた。	

・小3年男子（S・H）

【実態】

- ・集中して、積極的に取り組む。
- ・作りたいものを決め、自分なりの表現で作る。
- ・ちぎる、つぶす等の技法を使って、形を作ることができる。
- ・頑張ったことや感想を簡単な言葉で話す。



【個人目標】

- ・粘土に親しむ中で、作りたいイメージを見つけて作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「おおなきねんどTとI」 ・大きさは20cm, 平面。 ・意欲的に取り組む。粘土の塊を指で押し、模様を付けた。両手を使う。 ・細長くした粘土を粘土板に押しつけるようにして伸ばし、TやIの文字を作る。 (TやIは泣いている顔文字のイメージのようだ。)	2 ・Tを頑張った。	
2	・様々な技法を見せる。	作品名「くらくらおぼけ」 ・横10cm, やや立体。 ・手を止めることなく、真剣な表情で最後まで集中して作る。 ・丸めた粘土を手の平で押して平らにしたり、伸ばしたりする。それをいくつか付けて形を作った。 ・粘土を爪で押して模様をいくつも描く。	2 ・くるくる長くした。楽しかった。	
3	・大きく、高く作るように提案する。 ・体全体を使って作って見せる。	・高さ10cm, 立体。 ・手本をまねて、粘土に触ってこねる。 ・たくさんの粘土を伸ばし、垂直に立て、力を加えて下が安定するように立てる。何本も同じ形を作っていた。いつもよりも太く作る。		
4	・用具の使い方を示す。	作品名「ぐでたま」 ・高さ10cm, 立体。 ・真剣な表情で活動する。 ・用具で線を真っ直ぐ引いたり、斜めに引いたりして模様を付ける。線を重ねたり手で触って確かめたりしていた。	2 ・くるくる丸めた。	
5	・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。 ・制作のきっかけになるような言葉掛けをする。	作品名「はな」 ・大きさは7~8cm, やや薄い。 ・作りたいイメージがあるようで、粘土をたくさん丸めていた。 ・細長くした粘土を重ねるが、手の平でぎゅっと押して平らにする。それを何度も繰り返していた。 ・小さく丸めた粘土を教師に見せ、何度かアピールしていたが、それは作品に使わなかった。 ・時々、周囲の友達の様子を見ていた。	2 ・丸くした。たくさん重ねた。	
6	・制作のきっかけになるような言葉掛けをする。 ・様々な形を作ってみせる。	作品名「TELEPHON」 ・縦, 横20cm, 平面。 ・いろいろな形を作って提示するものの、関心を示さない。テーマに沿ったものは作らなかったが、手を休めることなく粘土に触り、意欲的だった。 ・表面には指で押したような模様。	2 ・大きく丸と四角を作った。楽しかった。	

・小4年男子（O・T）

【実態】

- ・活動のやり方が分かると、意欲的に取り組む。
- ・イメージを具体的な形にすることは難しいが、自分なりに考えて作る。
- ・ちぎる、叩く、伸ばす等の技法を使って作ることができる。
- ・自分の作品や頑張ったことを発表する。



【個人目標】

- ・粘土に親しむ中で、作りたいもののイメージを膨らませて作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	<欠席>			
2	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージが広がるような言葉掛けをする。 ・様々な技法を見せる。 	作品名「おぼけ」 <ul style="list-style-type: none"> ・横15cm, やや平面。 ・テーマが決まらず、取りかかるまで時間を要した。 ・最初は粘土を伸ばしたり、平らにしたりした粘土をいくつかくっつける。 ・最終的に、平らに伸ばした粘土に、細長い粘土、丸い粘土を押しながら貼る。いろいろ重ねて顔になった。 	2 <ul style="list-style-type: none"> ・Tを頑張った。 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・大きく、高く作るように提案する。 ・体全体を使って作って見せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高さ25cm。 ・体全体で粘土をこねる。拳や手の平で叩いて粘土を伸ばす。平らにした粘土を筒状にした状態で立て、高さを出していた。その後、体重をかけて潰したり、粘土を足したり、自由に形を作る。 ・粘土をたくさん使う。 		
4	<ul style="list-style-type: none"> ・制作のきっかけとなる言葉掛けをする。 ・用具の使い方を示す。 	作品名「パラソル」 <ul style="list-style-type: none"> ・高さ20cm, 立体。 ・用具を出すと、興味をもって選ぶ。金槌を選ぶと、粘土を叩き、形が変わる様子や、友達の様子を見て楽しそうに笑う。 ・大きな粘土の塊に、棒状に伸ばした粘土を付ける。教師の感想を伝えると、「口を付ける」と話し、粘土を口や鼻に見立てて、顔を作っていた。 	3 <ul style="list-style-type: none"> ・先生の顔ができた。 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージが広がるような言葉掛けをする。 ・工夫点や感想を伝える。 	作品名「わっかづくり」 <ul style="list-style-type: none"> ・縦20cm, やや立体。 ・粘土を細長く伸ばし輪を作る。その輪に別の粘土を通し、輪飾りのようにする。 ・太めの粘土を伸ばして、自分の鼻に持って行き「パオ〜ン」と象のまねをする。粘土の形からイメージしたことを話す。 ・粘土の塊に丸や細長い粘土を付けて顔を作っていた。 	3 <ul style="list-style-type: none"> ・顔と丸を作った。またやりたい。大満足。 	
6	<ul style="list-style-type: none"> ・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。 ・制作のきっかけとなる言葉掛けをする。 	作品名「かおとうしろがわのかお」 <ul style="list-style-type: none"> ・高さ15cm, 立体。 ・作り始めるまで、少し時間がかかる。 ・大きい塊に丸や細長い粘土を貼り付けて顔にする。平らにした粘土でもう一つ顔を作り、仮面のように塊の顔の上に貼った。頭の上に粘土を置き「髪の毛、作った」と話す。 	3 <ul style="list-style-type: none"> ・顔としっぽを作った。ころころ作った。楽しかった。 	

・小4年女子（K・S）

【実態】

- ・粘土に興味をもち、自分から活動に取り組む。
- ・作りたいものを、思いつくまま作る。
- ・ちぎる、丸めるなどの技法を使って作ることができる。
- ・自分の作品について、頑張ったことを発表する。

【個人目標】

- ・作りたいもののイメージを見つけたり、膨らませたりして作る。



回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「りんごとチョコレート」 ・それぞれ横幅2～5cmで小さい。 ・粘土を触っているが、手の動きが鈍い。 友達の様子を見て、名前の一部を作る。 ・りんごは、丸めた粘土の上にへたを付けた。「りんご作ってるんだ」と独り言を話す。	3 ・リンゴの、丸くするところを頑張った。嬉しかった。	
2	・イメージが膨らむような言葉掛けをする。 ・様々な技法を見せる。	作品名「りかちゃんおばけ」 ・大きさは15cm、薄い。 ・粘土を小さくちぎる。丸めたり、伸ばしたりしては、それをまた塊に戻す。 ・後半になってから、手を動かして、作品を作った。	3 ・顔と目を作るところを頑張った。楽しかった。	
3	・大きく、高く作るように提案する。 ・体全体を使って作って見せる。	・大きさは高さ20cm ・周りの様子を見ながら手の平サイズの粘土をいくつも積み上げる。 ・積み上げるときは、粘土の形やバランスは気にせず、思いつくまま積む。倒れないように、手でぎゅっと押さえる。 ・友達の粘土と見比べて感想を話す。		
4	・用具の使い方を示す。 ・工夫点や感想を伝える。	作品名「だんご、ぐでたま、ビー玉」 ・それぞれ縦5cm程度。 ・爪楊枝で、粘土の表面を刺すようにして模様を付ける。用具の爪楊枝から発想を得て、丸めた粘土を刺して「団子、作った」と話す。 ・作りながらイメージを膨らませ「〇〇作ろう」と独り言を話しながら作った。	3 ・ぐでたまの顔をかわいく作った。だんごを爪楊枝でさした。楽しかった。	
5	・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。 ・工夫点や感想を伝える。	作品名「ボウリング、ぐでたまのたまご」 ・大きさは5～8cm。 ・制作前は「リボンを作る」と話すが、友達の作品の鑑賞後、「ボウリングのピンにしよう」と話して作る。 ・平らな粘土の表面に模様を付けてからクルクルと巻くなど、工夫が見られた。称賛を受けると「次は〇〇作る」と話す。 ・たまごは、丁寧に丸め、表面はつるっとした質感に仕上げた。	3 ・ぐでたまを卵の中に入れるのを頑張った。 ・ピンを立てるところを工夫した。また作りたい。	
6	・制作のきっかけとなる言葉掛けをする。	作品名「ふね」 ・横15cm、高さ8cm。 ・「車」と言って作り始める。平らな粘土に側面となる粘土を貼り付けて大きくする。 ・粘土の境目は、指でなじませていた。 ・作る過程でイメージが変わる。 ・最後は「お母さんと私が乗る船作った」と話す。	3 ・立てるところを工夫した。 ・くっつけるところを頑張った。 ・うまく作れた。	

・小4年女子（Y・I）

【実態】

- ・粘土に興味をもち、集中して活動する。
- ・表現したいものをイメージし、細部まで考えて作る。
- ・粘土を引っ張る、のばす、つまむなどの技法を使って作ることができる。
- ・自分の作品の説明や頑張ったことを発表する。



【個人目標】

- ・イメージに近づくようにいろいろな技法を使って作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「つちどろのびのびおぼけ」 ・横幅20cm程度。 ・作りたいものをすぐに決め、作り出す。最後まで集中して取り組んでいた。 ・席から立ち上がり、いろんな角度から見ながら作る。	3 ・のびのび作りは丸のあと、鼻と口とほっぺを作った。できあがって嬉しい。	
2	・様々な技法を見せる。	作品名「ちいちゅうちびのびおぼけ」 ・大きさは35cm。 ・粘土の塊から、細長い粘土が伸びる。 ・前回の作品を思い出し、大きさや形を工夫していた。粘土を小さく丸め、目や鼻を丁寧に作る。 ・細長い粘土の部分はそっと扱う。後日、細い部分が折れて、ショックを受けていた。	3 ・小と中くらいの、のびのびおぼけを作った。嬉しい。	
3	・技法について伝える。	作品名「のびのびおぼけのおしろ」 ・大きさは20cm、立体。 ・作りたいもののイメージがはっきりとしている。作りながら、作品の細部の形や全体のイメージと世界観を説明する。 ・細部まで、考えて粘土で作る。 ・くっつけた粘土が取れないように、指でなじませていた。		
4	・制作のヒントとなるような言葉掛けをする。 ・用具や技法について伝える。	作品名「のびのびおぼけのおしろ」 ・横幅20cm、立体。 ・「これは、のびのびおぼけの・・・」と説明しながら作る。 ・指先を使って細部まで作っていた。 ・教師の言葉掛けや用具には、あまり反応を示さず、手で作る。	3 ・のびのびおぼけたちが住む所。発明の城。のびのびおぼけの城ができた。	
5	・技法について伝える。 ・工夫点や感想を伝える。	作品名「のびのびひめさまおぼけ」 ・縦25cm、立体。集中して作る。 ・作りたいイメージをもち、考えて作る。粘土を伸ばしながら「太くしないとね」と話し、粘土が薄いところは、厚くし、折れないように工夫していた。 ・用具を使い、模様を付ける。	3 ・姫さまの髪を太くできた。うまく完成。	
6	・制作のヒントとなるような言葉掛けをする。 ・技法について伝える。	作品名「のびのびおぼけクラウン」 ・縦25cm、立体。 ・これまでに覚えたことを使って作る。 ・細かい部分が取れないように、どうすれば良いかを考え、「〇〇すればいいね」と教師に確認しながら作る。 ・作りたいイメージがはっきりしており、集中して作る。	3 ・頑張っ、上手にクラウンを作った。レバーといすも作った。	

イ 中学部

・中1年男子（H・R）

【実態】

- ・粘土に触れることを好み、思いつくまま制作に取り組む。
- ・テーマがある制作では、イメージがもちにくく、言葉掛けが必要である。

【個人目標】

- ・手や用具を使った技法に興味をもち、技法を取り入れて作品を作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土に興味をもち、意欲的に取り組む。 ・思いつくまま、粘土を板に押しつける。 ・友達が制作する様子を見て歩く。 ・約横20cm, 縦15cm。 	5	
2	<ul style="list-style-type: none"> ・参考となる写真を準備し提示する。 ・手を使った技法を手を添えるなどしながら伝える。 	作品名「家」 <ul style="list-style-type: none"> ・「積み上げる」活動はおもしろがり意欲的に取り組んだ。 ・「伸ばす」技法は、教師が手本を示すが、やらなかった。 ・「壁を作ってみたら」と言葉掛けを受けたり、友達の制作の様子を見たりすることで、作り始めた。壁のある立体の家を作ったが自分でつぶしてしまった。 	5	  
3		<ul style="list-style-type: none"> ・粘土をちぎって土台に乗せる。 ・粘土の丸め方の手本を見て、きれいに粘土を丸めることができた。丸めた粘土をちぎった粘土の上に乗せる。「ちぎる」「丸める」の技法を用いて作った。 ・「丸める」技法を教師に褒められ、一定時間集中して、制作に取り組むことができた。 ・約横25cm, 高さ7cm。 		
4	<ul style="list-style-type: none"> ・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。 ・手や用具を使った技法を具体的に伝える。 	作品名「Aさんの顔」 <ul style="list-style-type: none"> ・友達の顔を作ることにし、粘土をちぎってくっつけようとする。「伸ばす」技法を教師が手を添えて伝えると、できるようになった。 ・ドベの使い方を覚え、髪の毛や顔のパーツをくっつけることができた。 	5	<ul style="list-style-type: none"> ・Aさんの顔を作った。髪の毛を頑張った。(教師と一緒に記入) 
5		<ul style="list-style-type: none"> ・粘土のちぎりが大きくなり、髪の毛が少しずつ太くなり厚みのある立体的な作品になっていった。 ・以前は、粘土を指で押しつけるように触っていたが、指先や手の平を使って表面がきれいになるように作っていた。 ・約横15cm, 高さ10cm。 	5	

※自己評価の数値は自己目標シート(図2)「きょうのがんばったきもち」1～5に対応する。

・中2年男子（N・K）

【実態】

- ・粘土に親しみながら，自分の作りたいイメージをもって作る。
- ・粘土を紐状に細くして，立体的な器を作ることができる。

【個人目標】

- ・自分のイメージに近づくように様々な技法を用いて，構想を立てて作品を作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「湯呑みと急須」 ・作りたいものをイメージして意欲的に取り組む。 ・粘土を紐状にして作品を作る。 ・約横8cm，高さ6cm。	5 ・雪だるまは丸めて，湯呑みと急須は細く伸ばしてくるくる回して作りました。	
2	・手を使った技法を伝える。	作品名「煙突付きの家」 ・「積み上げる」活動では粘土を立方体にして積み上げる。 ・箱型で煙突，玄関，窓がある立体的な家と小さい人を作る。 ・壁を高くすると粘土の重さで潰れてしまい，「壊れたから今日は壊れた家を作ろう」と話しながら作る。	4 ・最初に作ったときはめっちゃめっちゃで壊れそうだった。 ・煙突付きのを作りました。	
3		・家の屋根に小さなアンテナや粘土を筒状にした煙突を取り付ける。 ・時間が経ち粘土が硬くなってしまうと新しい粘土をもらいに行く。 ・犬小屋を作るときに，まず立方体を作ってから親指でへこみを作り入口にした。粘土を積み上げると重さで潰れてしまったことを思い出し，違うやり方で作った。 ・約横10cm，高さ15cm。		
4	・用具を使った技法やドベの使い方を伝える。	作品名「はやぶさ12号」 ・友達に「しから始まるものを作る」と話しながら作り始め，新幹線を作る。 ・粘土を何度も板にたたきつけて成形する。力加減も自分で調整していた。 ・教師からアドバイスを受け，ドベを使って1両目と10両目に窓を貼り付けた。「他の車両には難しいから窓も模様もつけない」と話す。	1 ・ドベでくっつけたところは両の間と先頭の頭の部分です。はやぶさを作っています。	
5		・車両同士をドベを使って，くっつける。 ・板から粘土がはみ出ないように，大きさを考えて作る。 ・作品発表では，「タイトルははやぶさ12号。線路をつけて反対側にも行けるようにした」と発表する。 ・約横45cm，高さ3cm。	5 ・ドベを使って両と両をつなげたり，線路を作りました。はやぶさ12号を作りました。	

・中2年男子（I・Y）

【実態】

- ・友達が制作している様子を見て、イメージを膨らませる。
- ・さまざまな形の粘土を組み合わせ、立体的で複雑な形の作品を作る。

【個人目標】

- ・自分のイメージに近づくように、手や用具を使った技法を用いて作品を作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「コップ」 ・周囲の様子を見ながら、制作に取り組む。友達の作品からヒントをもらい、自分でイメージを膨らませて作品を作る。 ・約横8cm、高さ7cm。	5 ・まず丸くして穴をあけてコップを作りました。	
2	・手を使った技法を伝える。	作品名「ドミドミマンション」 ・「積み上げる」活動では、土台となる粘土に次々と積み上げ、手で形を整える。周囲の様子を見て、友達に負けないように積み上げる。 ・思いつくまま制作に取り組む。制作の途中で友達の作品を見て、自分の制作に取り入れていた。 ・一軒家をイメージして作っていたが、途中からマンションに変更する。	5 ・ドミドミマンションを作りました。	 
3		・「全部の部屋にドアを付けない」「階段に柱をつけよう」「これだと大きすぎる」「ベランダもないとダメだけど難しい」など、イメージしたことを言葉に出しながら取り組む。 ・入口に階段を作り、階段に屋根を付けるなど、作りながらどんどんイメージを膨らませて取り組む。 ・約横20cm、高さ20cm。		
4	・用具を使った技法やドベの使い方を伝える。	作品名「S鉄道」 ・友達が「新幹線を作る」と言ったのを聞いて「ぼくは電車」と話し、取り組む。 ・はけでドベの量を調節しながら粘土をくっつける。 ・友達に「どこ行きの電車でしょうか」などクイズを出したり、電車に関する思い出を話したりしながら取り組む。	5 ・S鉄道。	
5		・ドベを使い、小さい粘土を付けていく。 ・粘土の表面がきれいになるように指先や手の平を使って形を整える。 ・作品に友達の名前を入れて「S鉄道」とタイトルを付ける。 ・約横20cm、高さ6cm。	5 ・電車をつくりました。	


・中1年女子（K・N）

【実態】

- ・自由制作では取りかかりに時間を要し、言葉掛けが必要な場面がある。
- ・イメージをもち、イメージに近づくように工夫して制作を進める。

【個人目標】

- ・粘土に興味をもち、さまざまな技法を用いて思いつくまま作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「クマさんとウサギさん」 ・テーマが決まらず、粘土を手の平で丸めながら周囲の様子を見る。 ・好きなキャラクターや動物を作ったらと言葉掛けを受けて作り始める。 ・約横4cm、高さ6cm。	5 ・クマさんとウサギさんを作ったところを頑張りました。	
2	・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。	作品名「家」 ・「伸ばす」技法では、ちぎれた部分を指先で付けて補強しながら長くしていく。板からはみ出るほど伸ばして友達と長さを競う。 ・「積み上げる」活動では、手の平で丸くした粘土を慎重に押し付けながら積み上げていく。 ・家を作るときも周囲の様子を見てから作り始める。 ・どんな家か、だれが住んでいるか質問を受け、「分からない」と答える。 ・約横15cm、8cm。	1 ・家の形を作ろうと思うと作りたくなくなります。家の形を作ろうと思って作ったらわたしが思う形ではないです。	 
3				
4	・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。 ・制作のきっかけとなる言葉掛けを行う。			
5		作品名「チョコレートケーキ」 ・誕生日が近い友達のためにチョコレートケーキを作る。粘土をハートの形にして上に乗せる。 ・ドベの使い方を覚え、形が崩れないように、付ける部分や隙間にはけを使い丁寧に塗る。 ・鑑賞では、友達の発表を聞いて、作品のどの部分を頑張ったのか気付いて、「ここだ、すごい」と感想を伝える。 ・約横15cm、高さ8cm。	5	





・中3年女子（K・S）

【実態】

- ・粘土に触れることを好む。
- ・自分の好きなものをイメージして制作を進める。

【個人目標】

- ・イメージに基づいて、さまざまな技法を取り入れながら作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「赤ちゃんのベッド」 ・粘土に触れながら何を作ろうか悩む様子が見られる。 ・大好きな赤ちゃんのベッドをイメージし、形を作っていく。 ・完成した作品を、赤ちゃんを抱き抱えるように持つ。 ・約横15cm、高さ5cm。	5 ・こどもの赤ちゃんのベッド。	
2	・励ましや称賛を中心とする言葉掛けを行う。 ・手を使った技法を手を添えるなどしながら一緒にやってみせる。	作品名「おうち」 ・「積み上げる」活動では、手の平を使って粘土を丸め、指先で形を整えたものを慎重に積み上げていく。 ・「伸ばす」技法では、粘土の表面がきれいになるように手の平を使い、その後粘土を伸ばした。	5 ・おうち。	
3		・厚みのある長い粘土を積み上げ、部屋が2つある家を作る。赤ちゃんのベッドがある部屋と好きな先生の部屋を作る。 ・様々な厚さの粘土を積み上げて壁を作り、高さのある立体的な家が完成する。 ・約横30cm、高さ8cm。		
4	・励ましや称賛を中心とする言葉掛けをする。 ・用具を使った技法やドベの使い方伝える。	作品名「ベッドとおうち」 ・粘土をこねながらテーマを考えていた。 ・指につく粘土が気になり、取りながら作る。 ・手の平を使って細長くした粘土を積み重ねる。 ・用具やドベは最後まで使わなかった。	5	
5		・指先を使い、粘土同士の接地面がきれいになるように形を整える。 ・赤ちゃんのお家を作り、粘土を積み上げて壁を作る。高さはあるため、粘土を厚くして崩れないように作った。 ・約横8cm、高さ12cm。	5 ・粘土で作りました。	

ウ 高等部

・高1年男子 (F・N)

【実態】

- ・積極的に制作に取り組む。
- ・イメージをもち、イメージに近づくように工夫して制作を進める。
- ・手をたたいたり、指先を使い細かいパーツを作ったりする。

【個人目標】

- ・粘土に親しみ、制作を振り返りながら、イメージを膨らませて作る。
- ・作りたいイメージに合わせて技法を工夫しながら、計画的に作る。



回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「雷」① 高さ約15cm。 ・粘土はあまり馴染みがないと話すが、粘土を触りながら考えて作っていた。 ・紐を組み合わせて生き物のように作る。 ・高く積んだとのこと。	5 ・次は大きく作る。	
2	・紐状に長く、高く作ように伝える。	作品名「アンカー(りくさん用)」② ・積極的に自分から制作に取り組む。 ・イカリのような形にした。全体的に平面的だが、表面に用具で線の模様を付けた。 ・横約50cm。	5 ・粘土で想像して作りたい。	
3	・立体感のある作品になるような言葉掛けをする。	作品名「たましいの墓」③ 横幅40cm。 ・10cm程度の煎餅状の円に紐状の粘土を巻き付けて徐々に大きくした。その上に紐状のアーチを太さや大きさを変えながらバランスよく複数付ける。追加して関連する作品も作り、世界感のある作品になった。	5 ・とにかく円状にやりました。	
4	・立体感をもつことができるようにドベの活用を提案する。	作品名「恐怖の塔」④ 高さ60cm。 ・常に手を動かして作る。笑顔が多い。 ・友達や教師の質問に答えたり、独り言を話したりして真剣な表情で作っていた。 ・立てた紐状の粘土を複数付け、高い塔を作る。ドベを活用してしっかり付けた。 ・倒れそうになると、粘土を付け補強した。 ・最後に紐状の粘土一本一本の表面に用具(ニードル)で模様を付けて仕上げた。 ・ペーパーアートのような作品になった。	5 ・とにかく高くしました。 ・もっと高くします。	
5 ・ 6	・全身を使い、ダイナミックに作ることを提案する。	作品名「いのりの山」⑤ 高さ15cm。 ・最初は「アイデアを出し切った」と話し、手が止まるが多かった。 ・周りの友達と制作について会話をしたり、時々独り言を話したりしていた。 ・小さめだがイメージに近づくように、紐を複数組み合わせて作る。 ・表面の模様など細部にこだわっていた。	5 ・とにかく低くしました。 ・カオスです。	
7	・今までの作品と同じ様に作ってもよいことを伝える。(ペーパーアートのような作品など)	作品名「キュービ」⑥ 高さ10cm。 「やまたのおろち」⑦ 高さ10cm。 ・「今回はコンパクトにする。」と話す。 ・最初は紐作りから始め、湯呑を作ると話して紐を積み重ねた。5本くらい重ねると壊しキャラクターを作りたいと話して作る。 ・しっぽなど細部にこだわる。 ・両手に収まる程度の作品を作った。 ・完成後は煉瓦の上に飾った。煉瓦とのバランスを考え、しっぽがはみ出すように煉瓦の隅に置くというこだわりが見られた。	5 ・とくにないです。 ・頭を真っ白にしてやりました。 ・つぎはていねいにつくる。	 

※自己評価の数値は自己評価シート(図3)の「評価」の1～5に対応する。

・高2年男子（A・K）

【実態】

- ・進んで制作し、試行錯誤しながら作る。
- ・粘土に触れながら、作りたいもののイメージをもつ。
- ・両手で平らにしたり紐状にしたり、用具を使い表面に細かい模様を付けることができる。



【個人目標】

- ・粘土・用具の性質を知り、制作を重ねる中で発想・構想する。
- ・様々な技法を用い、自分のイメージに合わせて工夫しながら計画を立てて作る。

回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (5段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「花のおきもの」① 高さ15cm。 「花のおきもの」② 横幅10cm。 ・1つ目は、机の上で粘土を転がし、平らにした部分には花のような模様を付けた。 ・2つ目は、平らにした粘土に指先を使って凹みを付けた。外側には、ヘラとルーラーを使い、放射状と点々の模様を付けた。	5 ・次は大きく作る。	
2	・紐状に長く、高く作ることを伝える。	作品名「木につたの飾り」③ 高さ30cm。 ・粘土をたくさんこね、長い紐状にした。 ・平らな土台を作り、太い柱を立て、細長い粘土を巻き付けた。更に柱を二本作り、細い紐状の粘土を巻き付けたり、アーチ状にしたりした。土台に用具で傷を付け、柱に土台がしっかり接着するように工夫した。	5 ・粘土をこねた。 ・グレードアップしたい。	
3	・色々な用具の使用を提案。 (接着には「ドベ」の使用を伝えた。)	作品名「皿」④ 横幅20cm。 ・最初は思いのまま手を動かし、途中でテーマを見つけた。 ・手の平で円盤状に作った。縁に紐をドベで付け、指先やナイフで丁寧に接着した。 ・作品を手回しろくろに乗せ、ナイフや歯ブラシで回転する様な模様を付けた。	5 ・ひびわれが消えるようになった。 ・歯ブラシで流れをイメージできた。	
4	・粘土をたくさん使い、大きく作ることを提案する。 ・手を使い作ることを提案する。	作品名「高いトゲのダイナミック」⑤ ・高さ20cm ・手を動かして考えながら制作に取り組む。 ・しゃがんだり、腕を動かしたりする等、手指以外にも体の動きが大きい。 ・土台を平らにして手型を取ることもあった。 ・長さの異なる太めの柱を数本作り、土台にドベで接着した。大小のバランスを考え配置した。	5 ・手形を取るのが難しい。 ・やったことのないものでチャレンジしたい。	
5 ・ 6	・イメージを具現化するプロセスにやりがいを感じているため、進捗ごとに称賛(驚く!)の言葉掛けをする。	作品名「テントと木」⑥ 横幅30cm。 作品名「井戸」⑦ 高さ25cm。 ・積極的に、集中して制作に取り組む。 ・一つ目は、前回同様、土台を作り、その上に柱のように5本立てた。根本に粘土をしっかりと付け、奥に薄くした粘土を壁状に接着した。土台には用具で模様を付け、柱にも少し模様を付けた。 ・前回よりも大きな作品になった。 ・二つ目は、手回しろくろ上で制作した。土台を作り、その上に一本の柱を立てた。ろくろを回しながら細部の成形や、連続する模様を付けた。 ・真ん中に穴を空けて、貫通させる工夫が見られた。	5 ・動物の足跡をたくさん付けて、深さも工夫。 ・高さとなめらかさと模様を頑張った。 ・更に高く模様を多くする。	
7	・体を使いダイナミックな制作を提案。 ・先輩の重量作品を持ち、量感の意識を促す。	作品名「すべりだい」⑧ 横幅35cm。 ・床置き姿勢で積極的に制作に取り組む。 ・粘土の可塑性を生かしながら大きな粘土も操作できるようになった。 ・イメージがはっきりしている様子で、具現化するプロセスに没頭していた。(達成感を感じているように見えた。)	5 ・模様を頑張った。 ・模様に挑戦。	

・高2年男子（Y・K）

【実態】

- ・取りかかりに多少時間を要し、言葉掛けがあると制作を始める。
- ・指先を使って、粘土を小さく丸め、粘土の塊に付ける。先端の尖った用具を使い、粘土に線をたくさん付ける。

【個人目標】

- ・粘土に興味をもち、材料や用具に親しみながら作る。
- ・様々な技法から、自分で使いたい技法を選んで作る。



回数	支援の内容	エピソード	自己評価 (3段階)	写真
1	自由制作。 実態把握。	作品名「無題①」 横幅20cm ・最初は粘土に触れず、見ていた。 ・粘土の表面にギザギザのローラーで模様を付ける活動のみを行う。 ・用具の選択、模様付けは、本人自身が考えて行った。(教師の関与なし。)	3 ・おしかった。 ・つぎはがんばろうね。	
2	・色々な用具とその使い方を提示する。	作品名「無題②」 横幅20cm ・用具の使用に興味を示す。6種類以上の用具で模様を付けた。(石、ローラー、紐、ヘラ、タワシなど)表面に乾燥した粘土片を埋めた。 ・まとめの鑑賞で作品を紹介されると、少し恥ずかしそうに嬉しそうな笑顔を見せた。	3 ・がんばった。	
3	・一緒に活動したり、称賛したり、促したりする。	作品名「無題③」 横幅25cm ・教師の働きかけですぐに制作せず、少し教師が離れると色々な技法を使い制作する。 ・用具で様々な模様を付けていた。 ・粘土を叩いたり、指でへこませたりし、普段と違う技法を見せ、「ドベ」も塗った。	3 ・よくがんばった。	
4 ・ 5	・「これ使ってみたら?」と言葉掛けし、色々な用具を渡す。麺棒で粘土を平らにして見せる。	作品名「無題④⑤」 横幅20cm ・最初は、テーマの「塔(高い建物)」をどう作れば良いか分らず反応なし。 ・タワシで模様を付けて、満足な様子だった。 ・麺棒を渡すと、側面で粘土の表面を叩いて喜んだ。麺棒を立てて穴状の模様や麺棒の側面で模様を付けた。 ・以前は、教師の提案に対し、少し用具を使う程度だったが、自ら進んで用具を見に行き、たくさん持って来て、模様を付けた。	3 ・あなほり。	 
6	・様々な用具を手の届く範囲に置き、自由に使用してよいことを伝える。	作品名「無題⑥」 ・教師が麺棒で伸ばすと本人も麺棒を粘土上で転がし始めた。板状になると竹串を3本横に並べて刺し、教師の表情を伺う。教師が頷くと安心して棒を刺し始め、時折褒められ意欲をさらに高め、最終的には約40本の棒やヘラを刺した。とても嬉しそう。	2 ・さしこみ。	
7	・多くの用具を目の前に準備して、自由に使えるようにする。粘土は板状しておく。	作品名「無題⑦」 横幅20cm ・開始時に「今日もたくさん刺していいよ。刺した物はそのままにしようね。」という言葉掛けを受け、最初から迷いなく夢中な様子で棒状の物を刺す活動をする。 ・用意していた用具を全て刺し終えた後も、「粘土に刺したい」という気持ちは強く、友達が使っている用具を見つけ、獲物を狙う様な目で見つめて静かに持って行く程、意欲が溢れていた。棒状の物が無くなると、プラスチックの破片も粘土に刺していた。	1 ・さくひん。 ・くみたて。	

※自己評価の数値は自己評価シート(図4)「今日は星いくつ」の1~3に対応する。

4 成果と課題

(1) 支援について

今回の研究では、児童生徒のいかなる表現も、教師が受け入れるという視点から、児童生徒が教師の支援を受け入れるか否かについても、児童生徒自身の意思（表現）であるということをも前提とした。そのため、児童生徒によっては支援を必要最小限に留める場合もあった。授業記録用紙のエピソードや作品そのものから、作品の変容や児童生徒が主体的に制作する様子が伺えた。そのことから、支援は有効であったと言える。支援別にまとめた成果を以下に示す。

ア 雰囲気作りのための支援

全学部で共通して、楽しい雰囲気作りや称賛・励ましを行った。称賛に加え、「素敵だね!」「〇〇が面白いね」「〇〇に見えるね!」など、児童生徒の思いに共感・共有することで、児童生徒の多くが制作への関心・意欲が高まり、進んで制作に取り組んだ。

小学部では、作品を作る過程で、児童自身から「見て!」「これは〇〇だよ」「〇〇を作っているよ」等の発言が増え、意欲的に粘土に向かっている姿が見られた。

中学部では、意欲が高まり、集中して粘土と向き合う様子が見られた。

高等部では、粘土に触れることに苦手意識がある生徒1名については、授業の最初に「〇〇しても大丈夫だよ」のように、安心感を与える言葉掛けを必要とした。また、称賛を受けることで、嬉しそうな表情を見せ、作品を鞆に入れて家に持ち帰ることがあった。

イ イメージへの支援

全学部で共通して、イメージが広がり、制作のきっかけとなるような言葉掛けを行った。支援をきっかけにイメージを掴み、制作する児童生徒もいれば、そうではない児童生徒もいた。そのときの児童生徒の気持ちを汲みとり、より適切な支援をしていくことが課題として残った。

小学部では、言葉掛けをきっかけに考えて制作する児童もいたが、制作や作品の様子にあまり変化が見られない児童もいた。言葉掛けだけではイメージを膨らませるには不十分であったり、教師の言葉掛けが、そのときの児童の思いやイメージにそぐわなかったりした場合があった。

中学部では、イメージがもちにくい1名については、やり取りを繰り返すことで生徒の内面が引き出され制作することができた。しかし、言葉掛けの仕方によっては教師の意見に沿った作品になってしまい、生徒自身の表現と離れてしまったのではと感じる場合もあった。

高等部では、1名については言葉掛けにとらわれず、回数を重ねるごとに新たなテーマを見つけ、自分の作りたいように作り、独自の作風が見られた。粘土に触れるのが苦手な生徒1名については、色々な用具を提示することで、用具を作品の一部として取り入れ独自の発想につなげて制作した。

ウ 技能への支援

全学部で共通して、手や用具を使った技法を提案した。児童生徒は表現したいイメージに合わせて技法や用具を取り入れたり、手や体全体を使ったりしながら制作するようになった。

小学部では、自分で作りたいイメージを明確にもちながらも、それをうまく形にできずにいた児童2名については、手を使った色々な技法の提案が作品の変化に繋がった。

中学部では、表現したいイメージに合わせて生徒自身が技法や用具を選択し、活用した。手の平や指先など手の一部分でしか粘土に触れていなかった生徒が、制作する作品の大きさや形に応じて手を使い分けるようになった。

高等部では、手での制作が苦手な生徒1名について、教師が麺棒やタワシ等の用具の使い方をやって見せることで、用具を使って形を作ったり模様を付けたりする様子が見られた。

エ 鑑賞での支援

全学部で共通して、鑑賞の場面で、作品に使われている技法や用具を紹介したり、工夫している点や教師の感想などを伝えたりした。鑑賞したことで、技法や用具を取り入れて作品に生かす児童生徒もいた。

小学部では、友達の作品を見て、同じように作りたいと話す児童や、同じテーマを選んで制作する児童がいた。しかし、多くの児童は「すごいね」と感想を話していたが、自分の作品づくりにそれを取り入れて制作するまでには至らなかった。

中学部では、作品の鑑賞の際に「粘土を積み上げた」「ドベを使った」など、自分で取り入れた技法を具体的に発表する生徒が増えた。また、友達の作品の作り方を見て、自分の表現に取り入れる生徒もいた。

高等部では、お互いの作品の面白さに気付き、称賛し合っていたが、友達の使っている技法や作風を取り入れることはなく、自分なりに工夫しようと努力していた。

(2) 自己目標シートについて

全学部共通して、制作を振り返るという点では、概ね有効であった。シートの文章記述から児童生徒の思いを読み取ることができた。しかし、評価の数値の選択や文章記述が難しい児童生徒も数名いた。また、満足度については、数値と作品の関連性を特に見つけることはできなかった。今回は自分の気持ちを満足度として選択する項目を設けたが、学部によっては、作品の満足度（思い通りに作れたか）と混同してしまうような様式であった。満足度を気持ちの面と作品の面で分けて自己評価できるように、整理する必要があった。今後は、実態に合わせた様式の検討が課題である。

小学部では、回数を重ねるうちに「何を作ったか」だけではなく、「どのように作ったか」を記入する児童が増えた。1名は次に作りたいものを、3名は「また作りたい」など、次回への意欲をシートに記入していた。満足度については、多くの児童が毎時間、3段階の「3. 大満足」を選んだ。

中学部では「家の形を作ろうと思うと作りたくなる。家の形を作ろうと思って作ったらわたしが思う形ではない。」と、感想を書いた生徒が1名いた。自己評価シートから、生徒の制作への思いを知ることができた。

高等部では、1名は最初から自分の制作を振り返り、次の制作でどのように作りたいかを具体的に書いていた。他の1名は制作をしていくうちに、次への目標を書くようになった。

(3) 作品の変容について

様々な技法や用具の使い方を知ることによって、平面的な作品から立体的な作品へと変容が見られた。

小学部では、紐状にした粘土で線を描くように作っていた作品から、粘土の塊を生かした大きな作品になるなどの変容が見られた。用具を使って細かいところまで表現したり、イメージに合わせて技法をいくつか組み合わせて作ったりするなどの変化も見られた。

中学部では、粘土を手の平で押しつけて作った平面的な作品から、粘土を丸めて積み重ねた立体的な作品になった。大きくダイナミックな作品から、細かい部分を接着した作品になるなどの変容が見られた。

高等部では、紐状の粘土の長さやカーブの仕方、接着法を変えることで、より細かい作品になった。用具を使い、模様の付け方を工夫するなどの変化が見られた。また、粘土に触れることが苦手な生徒の作品では、用具を粘土に刺すという新しい試みをするすることで、変化が見られた。

(4) 児童生徒の変容について

粘土と親しみ、積極的に制作する様子が回数を重ねるごとに多く見られた。

小学部では、手が止まると作り始めるまで時間を要していた児童が、テーマに迷いながらも手を動かし、粘土に触れる行為自体を楽しみながら制作する姿が見られるようになった。また、テーマに迷うことが多かった児童が意欲的になり、すぐに自分で作りたいイメージを見つけて作るようになった。授業の後、自分や友達の作った作品を見ながら話したり、別の単元に入った後も「粘土をやりたい」と話したりする児童もいた。

中学部では、粘土は好きだが扱い方が分からない生徒が技法を身に付けたことで、時間いっぱい制作に向かう姿が見られた。また、完成した自分の作品を壊れないように丁寧に扱う様子が見られ、作品への思いが感じられた。

高等部では、制作は好きだが粘土での制作の経験が少ない生徒が、粘土と親しみ、技法を知ることによってイメージを見つけ、工夫しながら制作に取り組む姿が見られた。また、同じような作風の生徒を隣に配置することで刺激を受け、自分なりに工夫しようとする姿が見られた生徒もいた。最初は見ていることが多かった生徒は、用具の使用に意欲を見せ、積極的に制作に取り組むようになった。

【参考文献】

- 1) 成田孝 (2008) 『発達に遅れのある子どもの心おどる土粘土の授業－徹底的な授業分析を通して－』．黎明書房
- 2) 成田孝 (2017) 『心おどる造形活動－幼稚園・保育園の保育者に求められるもの－』．大学教育出版
- 3) 文部科学省 (2009) 『特別支援学校学習指導要領解説総則等編<幼稚部・小学部・中学部>』．教育出版
- 4) 文部科学省 (2009) 『特別支援学校学習指導要領解説総則等編<高等部>』．教育出版
- 5) 和久洋三 (2006) 『子どもはみんなアーティスト』．玉川大学出版部